

# シンポジウム「オノマトペの〈感性〉」の 司会を終えて

中島 一裕

## 1. 表現の基底にある〈感性〉

2015年度の表現学会全国大会のシンポジウムテーマは、「オノマトペの〈感性〉」であった。このテーマは、事務局が用意して、パネラーの各先生にお願いしたのであるが、司会者としては、次のようなおもわくがあった。

実は、今から4年前、2011年度のシンポジウムのテーマが「感性と言語—日本語を中心に—」であった。その時も、色彩語の問題、近代現代の文学作品における感性・感覚の問題について議論があったのであるが、私としては、言語表現における「感性」ということと感覚的表現ということとをいったん切り離して、それぞれに探究する必要があるのではないかという強い思いがあった。というのは、言語表現の基盤をなす「感性」の問題と感覚的表現という問題とは、ともに言語表現だけにとどまらず、現代における表現を考える2つの柱ともなるべき重要な問題だと思えたからである。シンポジウムの際の各パネラーの提起された問題や発言については、各パネラーに論考の執筆をお願いしたので、私は、「感性の表現論」の面について、シンポジウムの際に十分に述べられなかった点と、今後の表現研究に期待したい点について書いておきたい。

言語表現も含めて広く現代の表現を特徴づけるのは、〈感性〉的表現とでも呼ぶべきものではないだろうか。五感に代表されるような感覚的表現というのとも異なり、また、理性、知性による論理の表現とも異なる、ひとりひとりの人間が自分の中の何ものかをたよりに思考や感情に形を与え、表現する、そうした何ものかを〈感性〉と呼ぶと、そうした意味での感性的表現が現代の表現の特徴をなしているのではないかと思われる。

こうした現象の背景には次のような事情がある。1つは、社会のあり方の反映である。現代社会は近代化と技術革新とグローバル化とが急速に進行した社会である。この社会においては、非近代的なもの、非科学的なもの、場所的・地域的なものが急速に失われている。そして、近代的な社会基盤の一定の整備がなされると、伝統、非科学、土地といったものとの対決がなくなり、論理的思考は居場所を失う。こうした状態の中では個人が社会を形成しているという実感が持ちにくくなり、あるのは、個々の「自分」が集まった集団であるという状況が生まれる。つまり、構成員が社会の一翼を担っているという帰属意識が希薄になるわけである。現代の表現を特徴づけるもう1つは、通信機器の変貌である。言語表現を含む表現のあり方は、文字、紙、印刷技術、電

話、写真、映画、ラジオ、テレビといった表現方法、通信手段の登場によって大きく変貌してきた。昨今の情報処理と通信手段の革新は、言語表現を含む表現のあり方を大きく変えつつある。かつては本の読み方に段階を設けて通読、精読、味読などと称したが、今やこれが疎んじられ、速読が求められる時代になった。通信手段も、かつての葉書、手紙は影をひそめ、メールの類の時代である。ここではスピードと簡潔さが求められるので、委曲を尽くす表現は嫌われる。

このような時代において、不断に行われる表現はいきおい複雑な筋道を嫌い、余韻や味わいを敬遠するようになる。簡潔、直截で「自分」に訴えてくる表現が求められるのである。こうした中で、表現が社会に通用する一般的な論理よりも、個人に訴える感性的なものをめざすようになるのは、当然であろう。

## 2. シンポジウムの進行

さて、全国大会当日のシンポジウムの準備の中では、3名のパネラーの先生には、上述のような些末なことまではお願いせず、あくまでも、シンポジウムテーマの中で従来のご研究の中で得られた知見をご披露いただくようお願いした。ただ、次のような、シンポジウムの内容予告をお示しし、これをふまえていただくことだけをお願いした。

「擬音語・擬態語などのいわゆるオノマトペは、2つの点で表現する者の感性とかかかっている。1つは語の特性から聴覚とかかわり、音感とかかかっている。それは、オノマトペの成立、変遷といった問題につながってゆく。

もう1つは、表現の現場にかかわる問題で、言葉を選び、言葉で場面を作ってゆく過程の中でどのような場合にオノマトペが選ばれ、それがどのような表現効果を持つのかという問題である。これは、言語表現を成り立たせる感性にかかっている。

さまざまな局面で〈感性〉が重視される現代、表現におけるオノマトペの位置を検討しながら、表現研究の新たな方向が模索できたら、と考えている。」  
（『表現研究』第101号掲載）

パネラーの先生方には、次のように異なる立場から、テーマについての知見の披露をお願いした。吉村耕治先生（関西外国語大学）には、日英語の比較の観点から、友定賢治先生（県立広島大学名誉教授）には、方言におけるオノマトペ研究の観点から、中里理子先生（白百合女子大学）には、日本語学の観点からのご発言をお願いした。シンポジウム当日は、各先生が従来のご研究の上に、新たな研究状況の紹介や新たな調査資料を提供なさった。私の印象としては、各研究領域におけるオノマトペ研究は想像以上に盛んに行われているようである。フロアとの質疑応答も活発に行われ、充実した時間であったが、司会者が全体を総括するだけの力量に欠けた点をご宥恕を乞いたい。また、各先生のご発表、ご発言は、本号に掲載予定の論考によってご承知願いたいものと思う。

じつは、シンポジウムに先立つ1、2か月の間、パネラーの先生方間でメールによる質疑応答が盛んに行われたことを記しておく。この事前準備期間にも3名の先生方に大いにご協力いただいたので

ある。

### 3. 〈感性〉の表現論のために

さてここで、オノマトペ研究を基礎づける〈感性〉の表現論といったことに触れておきたい。

今後、〈感性〉の表現論を進めるためには、次の3つの柱が必要となるであろう。

1つは、広い意味での〈感性〉の意味と働きについて明らかにすることである。ここで言う〈感性〉は、日常語の中でしばしば用いられる「感性」である。現在、「感性を磨く」とか「感性に訴える」などということばをよく聞く。こうした「感性」は、人間がものごとに対するときの構えかたであるとともに、そこから表現が導かれる出発点にあるものである。この点で従来、「直観」「着想」「原視点」と呼ばれてきたものとの関連する。ただ、これは、カント哲学などで理性、悟性と並べて感性と言われる場合とは異なっている。カントの批判哲学の中で、感性は、理性による判断の前提になる概念形成の中に位置づけられている。すなわち、視覚、聴覚などの感覚でとらえられたものが、カテゴリー化能力によって概念化されるとされるが、こうした感覚能力を感性と呼ぶ場合、「感性」とは、感覚与件の受容能力の総称ということになる。しかし、実際には、感覚、感情さらに情動と呼ばれるようなものが人間の行動を導き、その一つとして表現行動が存在することを思うと、広い意味での〈感性〉の働きをとらえ、表現を導くものとしての感性の働きをとらえるべきではないかと考える。

2つめに、表現の中での狭い意味での感性、すなわち感覚のあり方や働きを見

直すことが必要であろう。たとえば、「感覚」と「五感」とは同義語のようにして用いられるが、感覚を5つにしか分けないのはいかにも少なすぎる上に、不合理を含んでいる。少し考えてみても、外部の対象を受容するときに働く感覚と、身体の内側としての感覚とは異なっている。また、圧迫感、均衡感、空漠感といったものを感覚とみると、これらは、対象の感覚的受容の中にすでに評価性を含んでいるとも見られる。

この点に関しては、たとえば中村雄二郎が『共通感覚論』(岩波現代選書)の中で「現在最も広く用いられている」感覚の分類として「特殊感覚(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、平衡感覚)、体性感覚(触覚、圧覚、温覚、冷覚、痛覚、運動感覚)、内臓感覚(臓器感覚、内臓痛覚)」という分類法を紹介している。もっとも、近代生理学の中でも諸感覚の分類は定説を得にくいようであるが、この点は、むしろ言語表現の側から、諸感覚のあり方、それらの重なり、転化といった問題についての提言が可能なのではないかと思われる。つまり、先ほどの感覚の分類の中でも「特殊感覚」は、感覚器官と感覚対象との関係が客観的にとらえやすい。ところが、「体性感覚」と「内臓感覚」のような内部感覚は主観的なもので、外からはとらえにくい。こうした場合、その種類や程度の表現がオノマトペや比喩に委ねられる場合が見られる。また、感覚表現が名詞、動詞などの概念語に転用されたり、評価語に転用されたりする場合がある。こうした語の分布、転用の問題を考えることで、言語の側から諸感覚のあり方をとらえ直すことが期待されるのである。

3つめに言語表現研究の現代的課題として、従来、他の手段で表現してきたものが、感覚的表現に移行し、感性的表現の領域が拡大しているという問題がある。概括的に言うと、表現のあり方が理性的(知的)表現から感性的表現へと移行しているのではないかという問題である。たとえば、日常の食品の商品名やCMの中でオノマトペが多用されるようになってきている。たとえば、食品業界の調査によると、若い女性は「モチモチ」「ふわふわ」という語にひかれやすく、中年以降の女性は「季節限定」「朝採り」ということばに引かれやすいという結果が示される。すると、商品名や店頭に表示にこうしたことばが登場する。社会が成熟すると食品自体の栄養価や安全性は当然のことになる。すると、購買意欲を喚起するのは食品よりもことばの差異であるということになる。ことばの差異が物品の販売を左右するという傾向は、今後さらに拡大すると思われる。

数年前に学生とファッション用語の調査をした中に、「ゆるふわブーツ」という商品名があった。「ゆるゆる」と「ふわふわ」とをミックスした語だが、いかにも感性でものを選ぶ時代を表していると思われる。素材や製造元についての情報よりもことばと写真とでものを選択する時代の一例である。現在、産業界では、こうしたことばの調査研究が盛んであるというが、こうした日常の生活行動の中でどのような言語の特性が見られるのかを明らかにすることも、〈感性〉的表現の実体をとらえる上で必要な事項であろうと考えられる。

(帝塚山大学)

#### ◇表現研究関連文献紹介

(2頁から続く)

の作でいつも経験する事です。」「ソクラテスは、或る考へを比喩的に語つてゐるのではない。物事を具体的に考へようとして、おのづから比喩の中に立つのである。」「(鰻諭より) こんな例文を重ねながら、小林が「比喩」と「メタフォーア」を使い分けていたこと、そして「メタフォーア」にはI.A.リチャーズが提唱した新しい比喩観の読み取れることなどが、さらっと語られる。

小林が比喩を重視していたことに異論の余地はないと思うが、従来の小林研究に、彼の比喩をこれだけ正面から論じたものはなかったのではないか。「鰻諭」と韜晦しているが、小林秀雄論としても注目に値する内容だろう。

シェイクスピアの章は、彼の多彩な、時として矛盾する言語観を追ったもので、彼の言語観をあえて一つにまとめず、言語技術の巧みさと懐の深さが語られていく。シェイクスピアは言語の様々な機能と可能性を、セリフの中で実験・実証していたのではないか。引用された自在なせりふは、そんなことを考えさせてくれる。

本書は、筆者が紀要に書き溜めた論文をまとめたものである。各章のテイストは様々であるが、強引な読みを警戒しつつ、適切な用例を地道に収集していく誠実な姿勢が全編に貫かれている。表現学会らしい誠実さと豊かさを堪能できる一冊である。

(柳澤浩哉)